

幼児とのふれあい体験が、大学1年生の自己効力感と 教職志向に及ぼす影響の研究

南 伸昌・長谷部せり・久保田愛子・石塚 諭

宇都宮大学共同教育学部教育実践紀要 第11号 別刷

2024年8月31日

幼児とのふれあい体験が、大学1年生の自己効力感と 教職志向に及ぼす影響の研究[†]

南 伸昌*・長谷部せり**・久保田愛子*・石塚 諭*

宇都宮大学共同教育学部*

宇都宮大学共同教育学部附属幼稚園**

宇都宮大学共同教育学部において、学校現場を体験する前の1年生に、本学附属幼稚園で幼児と触れ合う体験活動を設定し、活動の前後において「幼児に対するイメージ」、「自己効力感」、「教職志向」についての質問紙調査を実施した。また、活動後に半構造化されたインタビュー調査を行なった。質問紙調査の結果、短時間の活動ではあったが、「幼児に対するイメージ」は大きく改善され、「自己効力感」、「教職志向」にもプラスの効果が見られた。実施後のインタビュー調査の結果からも、幼児のイメージが変容し、幼児との接し方について学びが得られ、教職志向も高まった旨が語られた。研究を通じて、幼稚園児とのふれあいを適切に設定することにより、教員を目指す上で重要な非認知能力「グリット」を強化し、教職を前向きに捉える機会を提供できる可能性を見出すことができた。

キーワード：大学1年生、幼稚園児とのふれあい、自己効力感、教職志向

1. はじめに

教員養成課程において、学生の教職志向向上は、所謂ミッションの再定義でも示されたように、全国的な課題となっている[1]。一方、教員養成学部において、入学時の教職志望率は100%近いが、学年進行に伴って低下し、卒業時には60%程度になってしまうという状況が過去10年以上に渡って継続している[2]。この低下を食い止めるため、学校現場体験を中心とした、カリキュラム上のさまざまな工夫が試みられている。

学校現場体験の中心となるのは教育実習（教壇実習）であるが、元来負荷の高い体験で、大学の授業とのギャップで学生が躓かないよう、多くの大学で1, 2年次からボランティア的な学校体験や授業観察の機会等を設けている[3]。現場を体験した学生の多くは、その体験を前向きに受け止めているという調査結果は多数報告されているが[4]、年ごとの教職志向低下傾向に歯止めが掛かかっていない状況となっている。

学校現場体験の一つに、中学校・高等学校家庭科における保育体験学習がある。大路は、高校生が乳幼児体験学習を行うことにより、子どもに対する興味関心が高まり理解が増すだけでなく、高校生自身が自分自身の生き方について考えるようになる等の学習効果があることを報告している[5]。ただ、単にふれ合えば良いというのではなく、学習効果は対児感情の良し悪しによって差が生じることから、対児行動を定量的に分析し、対児感情の評価を行い、生徒指導への反映を検討している[6, 7]。

鎌野は、中学生の保育体験学習による、幼児への関心・イメージと特性的自己効力感の変容から、その教育的効果の評価を試みた[8]。そして、保育体

[†] Nobumasa MINAMI*, Seri HASEBE**, Aiko KUBOTA*, Satoshi ISHIZUKA*: A study of the effects of interacting with kindergarten children on the self-efficacy and teaching career aspirations of first-year university students

Keywords: 1st year university student, Interacting with kindergarten children, self-efficacy, teaching career aspirations

* Cooperative Faculty of Education, Utsunomiya University

** Kindergarten, Cooperative Faculty of Education, Utsunomiya University
(連絡先: minami@cc.utsunomiya-u.ac.jp)

験学習を通じて幼児への関心が高まり、プラスのイメージが大きくなりマイナスのイメージが小さくなることを明らかにすると共に、幼児への関心が低かった生徒の特性的自己効力感が向上することを示した。

自己効力感とは、ある結果を生み出すために必要な行動を、どの程度効果的に遂行できるのかという個人的な確信の程度であり、臨床や教育など、特定の課題に固有なものと、より長期的に、より一般化した日常場面における行動に影響する、ある種の人格特性的認知傾向とみなせる特性的自己効力感の2つの水準があるとされている[9]。自己効力感の概念を、キャリア選択・決定についての研究に持ち込んだものがキャリア選択自己効力感であり、特性的自己効力感同様、キャリア選択に一定の効果を及ぼすことが知られている[10]。

自己効力感の強さは、個人が目標に向かって努力できる程度を表し、自ら進んで粘り強く学習し、困難に直面しても容易くはへこたれないなど、個人の行動に長期的に影響を及ぼす。教職に向けて4年間頑張ることは息の長い取り組みであり、その継続のために、学生生活の初期に自己効力感を高めることの意義は、単に教職志向を高めるだけでなく、学生のキャリア教育としても重要であると考えられる。

2. 研究方針

2-1. 本研究のねらい

本研究では、大学1年生が幼稚園児とふれ合う活動「幼稚園体験」をデザインし、本活動が学生のキャリア選択自己効力感に与える効果を、質問紙調査とインタビュー調査を併用して確認することをねらいとする。

キャリア選択自己効力感とは、他者からの働きかけによって高めることができる変数であり、そのためには、個人が必要な行動を達成できたという経験を持つことが重要とされている。本活動においては、学生が普段ふれ合う機会の少ない幼稚園児に、頼られ、(手探りで)応えて、喜ばれる体験を繰り返すことによる、キャリア選択自己効力感の変容に加え、幼児に対するイメージ、教職志向の変容についても調査する。

2-2. 「幼稚園体験」の設計

宇都宮大学共同教育学部においては、2年生は年

間を通じて公立小学校で現場体験を行う「教職ボランティア入門」を受講するので、対象はその前の1年生限定とした。実施時期は、1年生が学部の授業に慣れ、それぞれの「教師像」が見えてきた夏休みとし、幼稚園の都合も勘案して9月27日とした。活動は9:30-11:00の90分間とし、その前後でガイダンスや質問紙調査を行った。

幼児との関わりに慣れていない学生の場合、体験対象児は、ある程度幼児から関わってくるができる年中児以上が適していると考えられる。今回は、第2著者が担任をしている年中Yクラスにおいて実施することとした。

活動内容及び学生への指示は、大路らの「対児感情の良い生徒の対児行動」(下枠内に抜粋)を参考に、設定した[6]。

自分から幼児に話しかけるなど関わろうとする。数人の幼児に目を配り、どの子も受け入れている。幼児の目の高さで話そうとする。

図1に幼稚園体験実施要項を示す。今回は1回の上限を5名で募集したところ、3名の応募があったが1名は当日欠席となり、学生2名(男女各1名)での実施となった。

幼稚園体験実施要項 (附属幼稚園: Ⅸ028-622-9051)	
【日時】	9月27日(水) 9:30~11:00
【集合場所】	附属幼稚園多目的室(9:15集合) 附属幼稚園の門に入って中までお進みください。職員が案内します。
【活動クラス】	Yぐみ(4歳児クラス)
【持ち物】	上履き、外遊び用の靴、飲み物、帽子、筆記用具
【服装】	動きやすい服装 ※子どもとの関わりがあるのでスーツ等は適しません。
【駐輪場】	自転車やバイクは校門前で降り、手で押して駐輪場まで行く。(駐輪場は幼稚園の門を入ったところにあります。職員が案内します)
【当日の流れ】	9:15 登園 9:15-9:30 事前調査、ガイダンス(園長) 9:30-11:00 活動(下枠) 11:00-11:15 振り返り、事後調査(園長)
活動予定	<雨天時> 9:30 Y組で子どもとの顔合わせ(〇〇先生だよ。今日は一緒に遊んでくれるよ!) 9:40-10:00 運動会全体練習(移動の引率時、整列時の関わり合い、練習への声かけ) 10:10-11:00 保育室等での遊び(下記) <雨天時> 9:30-11:00 Y組で子どもと顔合わせした後、保育室や軒下で遊ぶ。
保育室等での活動内容	<保育室> 音楽に合わせたダンス 製作:色画用紙、段ボール、空き箱等で、自分たちの遊びに必要なグッズ作成。 ブロック、床積み木:自分なりの/友達と一緒にイメージを湧かせて作ることを楽しむ。 <テラス/軒下> 大型発砲スチロール、半円筒の活用:身体を動かすこと/イメージの世界を楽しんで関わり合う。 <中庭> 色水遊び:ヨウシュヤマゴボウなど自然物に関わって遊ぶ。 追いかけっこ:自分たちで簡単なルールを作って/追って追われてを楽しく遊ぶ。
園児の遊びは「学び」の原点です。子どもたちは、それぞれが自分たちのしたいことに向かって遊んでいます。先生は一緒に寄り添ってくれたり、楽しいネタを提供してくれたりする存在です。活動・遊びの中で、子どもたちからの「これやって」「こういうことしたい」「一緒に遊ぼう」等のアプローチを受け止めつつ積極的に関わって/遊んでみましょう。その時、自分の心/気持ちにどのような変化が生じるのを感じてください。	

図1. 幼稚園体験実施要項

2-3. 調査方法, 内容

2-3-1. 質問紙調査

質問紙調査は「幼児のイメージ」, 「キャリア選択自己効力感」, 「教職志向」について実施した。調査時間は活動前, 活動後とも, 5-10分程度であった。

幼児のイメージについては, 表1に示す, 鎌野が用いた3因子10項目について, 「そう思う5~そう思わない1」の5件法で回答させた[8]。

表1. 幼児のイメージの, 因子ごとの質問項目

因子	質問項目
幼児の扱いにくさ	わがまま/うるさい/ 面倒くさい/すぐ泣く
幼児の受け入れやすさ	やわらかい/おもしろい/ かわいい
幼児の有能さへの気づき	たくましい/性格が同じ/ かしこい

キャリア選択自己効力感については, 花井の5因子, 「目標選択」, 「情報収集」, 「自己評価」, 「計画立案」, 「意思決定」から, 本活動への関連性や回答者の負担などを考え「情報収集」に係る尺度を省き, 下枠内4因子20項目について, 「自信がある4~自信がない1」の4件法で回答させた[11]。

目標選択

- ・将来, なりたい自分を明確にすること
- ・仕事に対する自分の興味を理解すること
- ・今後の人生で, 自分が何をやりたいのかを明確にすること
- ・将来従事したい職業が何なのかをはっきりさせること
- ・自分にとって理想の職業とは何かを明確にすること

自己評価

- ・自分の性格を理解すること
- ・仕事をするうえでの自分の長所と短所を理解すること
- ・自分の得意・不得意を理解すること
- ・自分自身についてより深く理解すること
- ・自分の適性を理解すること

計画立案

- ・就職活動について具体的な計画を立てること
- ・将来のために今やっておくべきことの計画を立てること
- ・将来, なりたい自分に必要なことを身につけるための計画を立てること
- ・進路目標を達成するために, 計画を立てること
- ・就職活動をうまく進めるための計画を立てること

意思決定

- ・就きたい職業に就けるのであれば, 少々の苦勞でも我慢すること
- ・本当に好きな職業に就くためなら, 努力を惜しまないこと
- ・自分で決めた志望職業を実現するために意志を貫くこと
- ・困難な問題が生じても目標とする職業に就くために頑張ること
- ・志望職業に就くために粘り強く頑張ること

「教職志向」については, 「あなたは現時点で教員になりたいですか。」という質問に対して「とてもそう思う5~全くそう思わない1」の5件法で回答させた。

2-3-2. インタビュー調査

インタビュー調査は幼稚園体験実施後, 1か月程度が経過した時点で, 第三著者と学生2名が別日に1対1の形式で行った。インタビュー時間はそれぞれ30分程度であった。インタビューの前に, 研究の目的や個人情報への守秘について説明し, その内容に同意がなされた場合, 同意書への署名を依頼した。面接内容は許可を得た上でICレコーダーに録音し, 逐語文字化した上で分析の資料とした。

インタビューにおいては, 半構造化面接を行い, それぞれの語りを重視し, その内容を深めることを意識しながらも, あらかじめいくつかの軸となる質問を設定していた。その質問とは, 幼稚園体験でどのような体験が印象に残っているのか, どのような動機で幼稚園体験に参加しようと考えたのか, 幼稚園体験を通して学んだことと自身が変化したと感じたことであった。また, 上記について質問を終えた後, 活動後に実施した質問紙項目を提示し, 質問紙項目の中で, もし自身が特に変わったと感じた項目があれば, その詳細について語ってほしい旨伝え, 自身の変容について, 自己効力感と教職志向に関しても語りが得られるよう工夫した。

3. 活動状況

事前調査, ガイダンスを終えて, 学生A, 学生B共に幼児と対面した。幼児は運動会の全体練習の準備のため園庭に整列していたので, そこで顔合わせを行った。事前に学生には名札を配布し, 「自分が呼んでもらいたい名前を記入しておいてください」と担任(第2著者)から伝えた。学生A, 学生B共に,

「○○せんせい」と自分の名前（名字でなく名前）にせんせいをつけてひらがなで記入していた。担任が、名札を見ながら名札にかかれた通りに「今日一緒に遊んでくれるA先生、B先生です。宇都宮大学からきてくれました。今日はA先生、B先生がY組さんのみんなと遊んでくれます。」と紹介した。続けて学生A、学生Bが一言ずつ自己紹介をした。学生はそれぞれ自分の名前に加えて「よろしくお願ひします」と幼児に向かって伝えていた。その際学生A、学生B共ににこやかな表情で幼児をしっかり見ながら話していた。幼児も全員で「よろしくお願ひします」と言って、幼児とのふれあい体験が始まった。

幼児はさっそく「A先生」「B先生」と学生のことを固有名詞で呼び積極的に関わっていった。常に複数の幼児が学生A、学生Bを取り囲んでいる様子であった。以下にはこの日の保育活動の中心となる、保育室から中庭（年中児向けの庭）での遊びにおける、学生A、学生Bと幼児とのふれあいについて述べる。

学生Aは主に保育室内で幼児と共に遊んでいた。話す時に膝を付けて、幼児の目線に合わせて話している姿が印象的であった。制作のコーナーに関わって幼児と共に遊んでいると、幼児が「○○をつくりたい」と学生Aに話しかけた。すると学生Aは「どうするのが作りたいの？」と丁寧に幼児に問いかけそれに対して幼児が答える場面が見られた。すると次々と近くにいる幼児が話しかけてきて「私、○○作る」とか「私は○○がいい」「○○の絵を書いて」等と次々と要求をしてきた。それでも学生はにこやかにそれぞれの要求に応じていき、それぞれのことを受け止めている様子であった。そのうち、幼児から「(次は)○○しようよ」と誘われて別の場所(テラスでの活動)に移ったが、幼児の思いを聞きながら幼児に合わせて動いている姿が見られた。

学生Bは幼児と共に戸外(中庭)で遊ぶ姿が見られた。初めは複数の幼児に手を引かれ、幼児の動くままに動いている姿が見られた。すると幼児が「一緒に鬼ごっこしよう」と提案した。すると学生Bが「じゃあ先生が鬼をやろうか」というと幼児は嬉しそうに「うん」と言って鬼ごっこがスタートした。次第に鬼ごっこに参加する幼児が増え、10名近くの幼児たちと鬼ごっこをしていた。幼児は学生Bが追いかけてくれるのが嬉しい様子であった。学生B

も幼児の動きを見ながら走り方を調整し、幼児のペースに合わせて鬼ごっこをしている様子が見られた。すると、鬼ごっこの近くで色水遊びをしていた幼児が「B先生も一緒にやろう」と声をかけた。学生Bは鬼ごっこをしていた幼児に「今度は先生は、こっちで遊ぶね」と声をかけてから色水遊びの別の幼児に関わっていった。ヨウシュヤマゴボウを使っての色水作りをしていたが、学生Bは「これはどうやってやるの?これを使って(すり鉢とすりこぎ棒)やるのかな」と幼児に聞きながら一緒に体験していた。

活動中は、学生A、学生B共に楽しそうに幼児に関わる姿が見られた。活動中は常に複数の幼児が学生A学生Bを取り囲んでいた。ただただ幼児の傍にいるというよりも、幼児の遊びや遊び方をしっかりと見たうえで積極的に幼児、そして幼児のしている遊びに関わっていきこうとする姿が見られた。幼児の言葉をしっかりと聴き、意見(アイデア)や思いをそのまま受け止めている様子が見られた。その受容的な雰囲気が幼児の「一緒に遊んでほしい」「頼りにしたい」という思いにつながったのだと思う。学生A、学生B共に幼児とのやりとりを楽しみ、幼児の言動に反応し、能動的に動いていたので、自然に幼児の目線に合わせて話をしたり、幼児の思いを引き出すような投げかけをしたりして、幼児も安心感のもと満足感をもって遊べたと思う。

実際に活動が終わる際に、学生A、学生Bが帰ることを伝えると、幼児が一斉に学生A、学生Bを取り囲み、「ありがとう」「また来てね」「今後はいつ来るの」と、別れが名残惜しいようであった。学生A、学生B共に照れながらも嬉しそうにしている姿も印象的であった。最後に担任がお礼を伝えると、学生A、学生B共に「すごく楽しかったです」「子どもたちがかわいかったです」との返答があり、幼児だけでなく、学生自身も満足感があるように感じた。

4. 結果

4-1. 質問紙調査

4-1-1. 幼児のイメージ

幼児のイメージについては、鎌野らが設定した因子ごとの二人の平均値を表2に示す。

表2. 活動前後における因子ごとの平均値

因子	活動前	活動後
幼児の扱いにくさ	2.9	1.5
幼児の受け入れやすさ	4.5	4.7
幼児の有能さへの気づき	3.7	3.7

表2から「幼児の扱いにくさ」というマイナスのイメージは大きく減少していることが分かる。プラスのイメージである「幼児の受け入れやすさ」は、活動前の時点で4.5と高い値であったが、活動後は更に0.2ポイント上昇していた。「幼児の有能さへの気づき」については、「たくましい」「かしこい」が前後とも4か5、「性格が同じ」が前後ともIか2となっており、尺度全体としての変化は見られなかった。

4-1-2. キャリア選択自己効力感

キャリア選択自己効力感の因子、「目標選択」,「自己評価」,「計画立案」,「意思決定」ごとの二人の平均値を、活動の前後でそれぞれ求めたものを、表3に示す。

表3.活動前後における因子ごとの平均値

因子	活動前	活動後
目標選択	3.3	3.5
自己評価	3.1	3.4
計画立案	2.9	3.4
意思決定	3.7	4.0

何れの因子の値も活動後に大きくなっており、「計画立案」が0.5と最大の伸びを示していた。伸びは然程ではないが、「意思決定」は活動後に4.0と、一番大きな値を示していた。

4-1-3. 教職志向

「教員になりたいですか」という質問に対し、活動前は「ややそう思う」1名,「とてもそう思う」1名であったが、活動後は両者とも「とてもそう思う」となっていた。

4-2. インタビュー調査

以下,2名の語りを記す。「」は語りの引用を示し、語りにおいて、文意がつながるよう筆者が言葉を補足した場合<>にて示した。

いずれの学生についても、幼稚園児と触れ合う機会がそれまでほとんどない状況であった。体験を通して学んだことや変化した点を尋ねた際、2名の学生双方ともに共通して、教員としての子どもと接する際の距離感と子供に対するイメージの2点が語られたため、その2点についてまず詳述し、その後、キャリア選択自己効力感と教職志向に関する語りを挙げる。

4-2-1. 子どもと接する際の距離感

学生Aに体験を通して学んだことを聞いた際、子どもと接する際の距離感が語られた。学生Aは体験中、子どもたちがお互い悪気はないが言い合いになるような場面に出くわしたといい、その際「どうするのが適切なのかなっていうのはすごいなんか考えたなっていうのは思いました」という。たとえば外遊びしてる時に子どもがはしゃいで、滑り台の高いところに登っている際、どこまで「目を配らせてあげたらいいのか」、「あんまり過保護にというか、ずっと言い過ぎても逆に学びがなくなっちゃうのかなって思うんですけど、でも実際そのけがしちゃったりとかしたら大変だなと思う」ため、「どのぐらいの距離感が一番いいのかなっていうのは、すごい感じました」と語った。

学生Bは、小学校教員を目指す上で幼稚園体験が役立つかもという動機で体験に参加したとの語りが見られたため、実際に行ってどのような点が役立ったか尋ねたところ、子どもと接する際の距離感に関する語りがみられた。「先生として接する時って、あの、その幼稚園生との、幼稚園生に限らず、まあ児童ともそうですけど、距離感ってどう保てばいいのかなっていうのはちょっと疑問に思って」「そこら辺の距離感がなんか自分教師になったらちゃんと保てるのかなって、その正しい距離感でいれるのかなっていうのはちょっと感じました」という。「幼稚園の先生の方々も、まあ一緒に遊びますけど、遊んだりもちょっとしてましたけど、でもやっぱり先生としてのあれも、なんて言うんでしょう、ただ遊んでばっかじゃ駄目じゃないですか。(中略)だから、そこら辺を、まあ考えさせられたというか、そこはちょっと、いざ自分が教員になってちゃんと指導をできるかなっていう。」ということで、今回の体験を自身に引き付けて子どもとの距離感がどうあるべきかを考えていた。

そのように感じた例としては、運動会の練習をしている場面が語られた。「運動会の練習してる時にちょっと何人かその指示と、指示と違うというか、その終わったらここの枠の中で待っててねみたいなことあったんですけど。まあその、その枠から外れて、なんかちょっと遊具で遊んじゃってる、してる子どもとかがいて。」「自分、その時ちょっとなんか、なんて言えばいいのか分からなくて、あんま強く言っちゃうのもあれですけど、何も言わないのもいかなものかなと思ったんですけど。そしたらなんでしょうね、なんか幼稚園生の先生方はうまい具合にあれするんですよね。なんかそれはすごい具体的にどうだったとかっていうふうにはちょっと難しいんですけど、漠然となんか、なんかうまく言うなって。」と幼稚園の先生方の接し方に学びがあったという。そして、幼稚園の先生方が子どもたちと一緒に遊びながらも一人一人を見ているところを目の当たりにし「すごいですね、あれはなんか。あんなにちゃんと、あんな元気な子たちを一人の先生で対応し切ってるのは。」と感嘆した様子を語った。

4-2-2. 子どもに対するイメージ

学生Aに体験を通して自身の変化を感じたかを尋ねた際、「小っちゃい子が好きになったというか、不快感というかがまったくなくなかった気がするなっていうのは感じました」と小さい子への不快感がなくなったことが語られた。さらには「子どもって面白いな」と感じたことも語られた。「自分にはない発想というか、ほんとに自分の感情で動いてるという、特に幼稚園生とかは。その自分のやりたいことをやってとか、その自分の思ってることをそのまま表現してとか。(著者：なるほど。)でも、それでもやっぱり出せない子とかも、感情出せない子とかもいてみたいな感じで。そう、なんかその、またその大人と接する時とは違う感覚だから、結構そう感じたかなっていうふうには思いますね、はい。」とのことであった。

学生Bについても、自身の変化を感じたかを尋ねた際、「イメージどおりの部分もありましたし、思ったよりも、まあなんかちょっと大人の部分も意外とあったのかな」と思った以上に子どもが大人に感じたことが語られた。「ほんとにかわいい存在ぐらいにしか思えてなかったんですけど。でも、なんかやっぱおのおのにすごい、幼稚園生の段階でも各々

にちゃんと個性っていうか、っていうのはすごいあるなって感じましたし」「僕が思ってた以上に意思表示はしっかりするんだな」と感じたという。

4-2-3. キャリア選択自己効力感に関連する語り

質問紙を見返した際、いずれの学生も、「意思決定」に関わる項目について自身の変容があったと語られ、学生Bについては「自己評価」の項目についても言及が見られた。

学生Aは、キャリア選択自己効力感の「意思決定」の項目にあたる「好きな職業に就くなら努力を惜しまないこと」等に関する言及が見られ、「実現するために頑張っていくみたいなのとかの項目が結構、やっぱ体験してみたらほんとにそのやりたいって思う職業なら、私結構もっと頑張れるなっていうのは感じました」と語った。「実際に触れ合ってみて、あ、そのさっき言ったようにそのどういうふうに見てあげるのがいいんだろうっていうか、その指導的な場面で。で、その疑問に思うこととかもっと詳しく知りたいなって思うことが結構見つかったというか、感じたんで(中略)逆になんかそういうことを勉強していきたくっていうのは特に、あの、っていう思い、気持ちが強くなったっていうのはあって。」と今回の体験を通して学習意欲が高まったことが語られた。

また学生Bについても「基本的にその頑張ることとか、そういうことは、まあちょっと強くなったかなっていう、全体的に」と職業に就くために頑張ることは自信がついたと述べ、キャリア選択自己効力感の「意思決定」の項目にあたる「困難な問題が生じても目標とする職業に就くために頑張ること」が強まったと述べた。一方、キャリア選択自己効力感の「自己評価」の項目にあたる「自分の得意・不得意を理解すること」という項目については、「不得意って教師の立場としてって話になるんですけど、僕が行ってみてなんか注意すべきことをちゃんと注意できるかなっていうのはちょっと不安に感じた」という。「さっきの、その運動会のあれもそうですし、駄目なことをちゃんとすぐ駄目って言えるかなっていうのが、自分なりの教師としての課題かなっていうふうには感じましたね。」と自身の課題が見えたことが語られた。

4-2-4. 教職志向について

教職志向については、質問紙を提示した際、双方ともに、教職志向は高まったと語った。学生Aは、「園児と触れ合ってくってというのはすごい自分、思ったより自分はそのほんとに好きなんだっていうのをなんか気付けた気がします」と言い、「幼稚園の先生になるっていうのも、その一つの選択肢でありかなってというのはすごく感じました」と語った。また、「もっと詳しく知りたいなって思うことが結構見つかった」と語った。特に1年次は座学が多く、体験活動がなかったため、「座学だけではわからないな」と思っていたため、「本当にそれがやりたいことなのかとか、その、今やっている勉強がどう役立つのかとかかっていうのは感じてた」ため、今回の活動が学習意欲にもつながると感じたと言った。

また学生Bは「やっぱ子どもと接するの、接することがやっぱ自分に合ってるというか好きだなんていうのがあって、その気持ちはやっぱ強くなった」と語った。その理由としては、「何時間かしかやってないですけど、なんかちょっとでも嫌だなんて思ったことが一つもなかった」と嫌だと思ったことが全くなかったことを挙げた。「やっぱもちろん大変なことでもいざ<教員に>就いたらあるんでしょうけど、でもそれをなんか抱え込み過ぎずにできそうだっていうふうにちょっと感じました。周りの友達とかで、やっぱ子どもと遊ぶのは嫌だとかという人もいって、その友達とはやっぱそこは違うかなみたいな」と教員になる上での自信を深めた様子が語られた。

5. 考察

体験後の質問紙調査では、「幼児の扱いにくさ」というマイナスのイメージが大きく減少していた。インタビュー調査では「不快感」がなくなった旨の語りがあり、「思った以上に意思表示はしっかりするんだな」という印象を受講生は持てたようだ。コミュニケーションの基本は相手とのバックグラウンドの共有であるが、年齢差が大きいことから体験前はそこに懸念を感じ、「不快感」等と表現したと考えられる。その懸念が実際にふれ合うことにより解消し、一つの成功体験として自信に繋がると共に、「自分の感情で動いている」が「感情出せない子もいる」ことに気付けたように、幼児理解が進むきっかけとできたようだ。

ただ、子供と接する際の距離感については、距離感を考えたレベルであり、どのような距離感が理想的なのかという自分の考えをもつには至っていなかった。問が生まれたという段階であり、これが座学の授業とつながっていくと、有用な学びにつながる可能性がある。

キャリア選択自己効力感については、「目標選択」、「自己評価」、「計画立案」、「意思決定」4因子のうち、質問紙調査においては「計画立案」が0.5と最大の伸びを示し、「意思決定」は活動後に4.0と一番大きな値を示していた。ただ、インタビューにおいては後者に関する語りのみが見られ、前者については語りが見られなかった。

学生A、B共に、「意思決定」のうち「困難な問題が生じて目標とする職業に就くために頑張ること」、「好きな職業に就くなら努力を惜しまないこと」等に関する言及が見られ、目標実現のために頑張ることへの自信がついたという語りがあった。このことから、本体験が、ヘックマンらが提唱した非認知能力の「グリット」を伸ばすための介入に資する活動を提供できていると考えられる[12]。「グリット」は長期目標の成否と強く関連するもので、学び続ける教師として頑張ることや、教員採用試験の成否などに直接関わってくる。幼稚園体験を「対児感情の良い生徒の対児行動」をベースに組んだ成果とも考えられ、引き続き検証を進めたい。

教職志向については、元々二人とも高目ではあったが、活動後に向上が見られた。ただ、学生Bについては自己効力感で不安な点も感じられていた。今回はその不安も自己評価が高まったという意味で前向きに受け止められており、他の要素もあって教職志向は高まっていたが、学生によっては、このような体験をすることで、不得意な点を強く感じ、かえって教職志向を低めるパターンもあり得る。この点については、サポートや配慮が必要なところかもしれない。

6. まとめ

教員養成課程の大学1年生を対象に、幼稚園において幼児とふれあう「幼稚園体験」を試行した。参加者は男女2名であったが、何れも活動後に「幼児のイメージ」、「キャリア選択自己効力感」、「教職志向」において意識の向上が見られた。インタビュー調査の結果から、本活動が「グリット」を伸ばす介入と

なる可能性が示唆されたが、その効果の一般化については、事例を集めることにより検証を進めたい。

謝辞

本研究の一部は、科学研究費（課題番号：21K02625）の助成を受けて行われた。

令和6年4月1日 受理

7. 引用文献

- [1] 教員養成分野のミッションの再定義結果、
https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/houjin/1342089.htm
- [2] 国立の教員養成大学・学部及び国私立の教職大学院の令和4年3月卒業者及び修了者の就職状況等について、https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kyouskyou/kyoushoku/1413296_00006.htm
- [3] 南伸昌, 学校ボランティア活動を含めた教育実習改革の効果検証 ―学生の意識と達成目標に基づく評価の変容―, 日本教育大学協会研究年報, 39, 87-97 (2021)
- [4] 南伸昌, 教育実習において実習生が感じる課題と教職志向との関係, 日本教育大学協会研究年報, 37, 83-93 (2019)
- [5] 大路雅子・松村京子, 雑誌掲載事例にみる中学・高等学校の乳幼児体験学習の効果と問題点, 日本家庭科教育学会誌, 41-1, 55-62 (1998)
- [6] 大路雅子・松村京子, 高校生の幼児体験学習時の対児行動に関する研究 (第1報) ―特徴的対児行動―, 日本家庭科教育学会誌, 41-4, 31-38 (1998)
- [7] 大路雅子・松村京子, 高校生の幼児体験学習時の対児行動に関する研究 (第2報) ―対児行動出現率と対児感情との関係―, 日本家庭科教育学会誌, 41-4, 39-43 (1998)
- [8] 鎌野育代・伊藤葉子, 子どものイメージと自己効力感の変容からみる保育体験学習の教育的効果, 日本家庭科教育学会誌, 52-4, 283-290 (2010)
- [9] Bandura, A., Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological review*, 84, 191-215 (1977)
- [10] 浦上昌則, 学生の進路選択に対する自己効力に関する研究, 名古屋大学教育学部紀要, 42, 115-126 (1995)
- [11] 花井洋子, キャリア選択自己効力感尺度の構成, 関西大学大学院人間科学, 69, 41-60 (2008)
- [12] 竹橋洋毅, 非認知能力 概念・測定と教育の可能性, 北大路書房, 29-44 (2021)

A study of the effects of interacting
with kindergarten children on the self-efficacy
and teaching career aspirations
of first-year university students

Nobumasa MINAMI, Seri HASEBE, Aiko KUBOTA, Satoshi ISHIZUKA